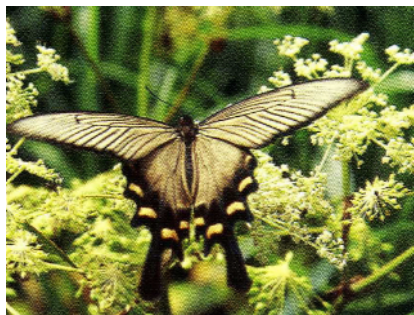


小田原教育

第116号

平成24年3月23日



ジャコウアゲハ

小田原の丘陵の多くはミカン畑として利用されており、ミカンの葉を食べて育つアゲハの仲間も見ることができます。

しかし、ジャコウアゲハは、毒草であるウマノスズクサを食べて育つため、鳥におそわれにくいそうです。

目 次

巻頭言

「校内におけるOJTを活用した人材育成」

小田原市教育研究所運営協議会委員長 2

1 小さなころみ

「従来の教育活動をキャリア教育の視点でとらえ直す」

小中学校が連携したキャリア教育に関する研究員 3

2 学びの架け橋

①「理科好きな子を育てる学習の工夫」

理科 プロジェクト研修員 4

②「小・中のつながりを意識したコミュニケーション能力の育成をめざして」

外国語活動・外国語 プロジェクト研修員 5

3 ある教室から

「表情の大切さ」

教育指導課指導主事 6

4 研究所だより①②

教育指導課指導主事 7

8

校内におけるOJTを活用した人材育成

小田原市教育研究所運営協議会委員長



現在、各学校においては確かな学力の向上、いじめ、不登校、キャリア教育の推進など、教育内容や教育活動の充実が求められています。また、一方で学校は、多様化する子どもたちの行動や保護者からの様々な要求への対応など、日常的に抱える複雑化した課題を適切に解決していかなければなりません。これらの課題解決のためには、学校全体として教育力を向上させることはもちろん、教員一人ひとりの資質・能力を高め組織的に機能させていく必要があります。

しかし、現在、団塊の世代の教員等の大量退職に伴い、学校の中では急速に若い教員が増えています。実際、平成 22 年度の小田原市内の小中学校教員の経験年数別人数分布を見てみると、小学校では、10 年未満の教員がすでに全体の 45% を占める状況になっています。中学校でも、今後 10 年後ぐらいから若い教員が大幅に増加する傾向となっています。このような状況の中、これまで学校を支えてきた経験豊富な教員の指導技術や知識等を次の若い世代に引き継ぎ、経験の浅い教員を確実に育成していくことが学校の教育力向上のために急務となっています。

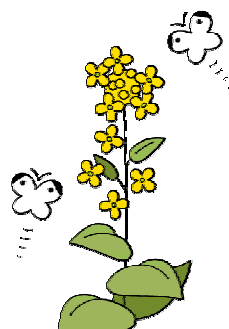
もちろん、これらの課題を解決するために、今までにも、経験の豊富な教員から経験の浅い新採用教員等に指導・助言が行われてきました。しかし、これからは今までの人材育成のあり方を見直し、OJT（On The Job Training）を活用した人材育成を組織的・計画的に取り組むことが必要になってきています。

OJT は、職務を通した人材育成であり、すべての教員を対象に身に付けるべき力を意図的、計

画的、継続的に高めていく取り組みです。そして、OJT には、①新たな研修の時間や場所を必要としない。②一人ひとりの課題に応じた具体的な指導が可能であり、途中での指導方法の改善も可能である。③教える側にとっても自分の指導や分掌のあり方を見直すよい機会となる。④育成される側がいずれは育成する側になり、育成機能の連続性が校内に確立できるなどの実効性があります。また、方法としては、①先輩からの日常的な助言や仕事ぶりから学ぶ。②新たな職務の経験から学ぶ。③教員同士で相互に学び合う場を設定する等があります。

また一方、導入されている趣旨は少し違っていますが、神奈川県では目標管理手法によって人事評価を実施しています。この各個人が目標を立て 1 年間を通してその目標達成に向けて努力していく目標管理手法を、一人ひとりの教職員の資質・能力を高め、学校を組織的に機能させ教育力を高めていく OJT として捉え、充実させていくことが必要ではないかと考えています。

OJT を進めるにあたって大切なことは、校内で新たなものを立ち上げるのではなく、今まであるものをもう一度見直し、それを生かしていくことではないでしょうか。例えば、校長、教頭、総括教諭、分掌の主任が、もっと各個人が立てた目標を意識し、1 年間を見通して意図的・計画的に関わり合い、教員相互が日常的に OJT を実施していく体制を校内に整備していくことができるのではないのでしょうか。それこそが、今日の様々な課題を解決して行く第一歩となるのではないのでしょうか。



従来の教育活動をキャリア教育の視点でとらえ直す

小中学校が連携したキャリア教育に関する研究員



1 はじめに

近年、就職・就業をめぐる環境は大きく変化しています。また、若者の離職率の高さや勤労観・職業観の希薄化、コミュニケーション能力や対人関係能力など社会人としての基本的な資質・能力の低下が懸念されています。また、将来の自分の夢を描けず、学ぶ意欲が欠如した子ども達の増加も指摘されています。こうした状況の下で、児童生徒の社会的に自立可能な資質を育むキャリア教育が求められています。しかし、現場では、他の教育課題に追われ、キャリア教育の十分な実践が行われていないように感じられます。そこで、私たちは、キャリア教育が今一步浸透しない現状を解決することをねらいとして、研究を進めてきました。

2 研究内容

キャリア教育リーフレット

小田原市内の小学校で、キャリア教育がどのように進められているか実態調査を実施しました。調査から、学校で全体計画や年間計画を作成されていない学校が80%以上あることがわかりました。しかし、多くの学校が計画をしていなくても、児童のキャリア発達にかかわる様々な取組が行なわれていました。このことから、今、行なっている教育活動をキャリア教育の視点で見直し、児童のキャリア発達にどう関連しているのかを意識して日頃の指導にいかしていくことが、小学校でのキャリア教育推進の第一歩であると考えました。そこで、九研究会では、先生方にキャリア教育の視点を持ってもらうためのリーフレットを作成

しましたので、ぜひ、校内研修などにご活用いただきたいと思います。

自己アピール書

小・中学校で連携したキャリア教育の実践として、キャリア教育の視点から子どもたちが自己肯定感を高められるよう、小学校卒業時に自己アピール書を作成し、入学する中学校へ引き継ぎました。中学校では、この自己アピール書を進路ファイルのスタートとして位置づけ、その後の中学校3年間の自分自身の成長をふりかえることなどに活かせるものにしたいと考えました。

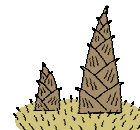
関わる力を育てる実践

小田原市の学校教育目標のひとつに「関わる力」が掲げられています。また、今の子どもたちにとって最も重要なキャリア課題について本研究会で探った結果「人間関係能力」であることが窺われました。そこで、「人と関わり合える子を育てる方法」を研究会内でまとめ、それを実践しました。

3 今後の取り組み

研究員それぞれが、キャリア教育の視点を持って実践した教育活動を現在まとめています。また、国立教育研究所の資料をもとに、キャリア教育を視点とした、子どもの能力を把握するためのアンケートを現場で使いやすいようにつくりました。どちらも、研究紀要の中に掲載する予定です。各校のキャリア教育推進の一助になれば幸いです。

理科好きな子を育てる学習の工夫



プロジェクト研修員(理科)



1 プロローグ

「理科好きな子を育てる」ためには、「関心を高める工夫」と「わかることへの支援」が大切であると考えました。そして、どのような取り組みが小学校と中学校で、そしてその連携において、何ができるかを検討した上で、改訂された新指導要領の4つの領域構成（エネルギー、粒子、生命、地球）の中から、「粒子」を小・中共通の柱として、それぞれの授業実践をとおして、研究を進めました。

2 実践から

（1） 22年度【中学校での授業公開】

2年生第1分野「化学変化と原子・分子」から水の電気分解をとりあげました。指導計画の見直しにより、発生する物質（気体）が何であるかを、生徒が予想しやすくなるのではないかと考えました。また、少人数のグループでの話し合いの場面では、発表用ホワイトボードの使用が、粒子のモデルを考えたり、それぞれの考えを説明したりすることに有効であると考えました。

小学校では、6年生の「物質・エネルギー」から、「水溶液には酸性、アルカリ性、中性のものがある」のうち中和をとりあげました。見ることでできない微視的な変化における粒子の振る舞いを実験結果から考察し、個々のイメージを図示しました。イメージ図を描くことで、それぞれの思考を深めることができたと考えています。また、デジタルカメラとプロジェクターを使用した発表は、児童のイメージ図を効果的に提示する上で、有効でした。

（2） 23年度【小学校での授業公開】

6年生の「物質・エネルギー」の授業を公開しました。金属が溶けた水溶液から溶

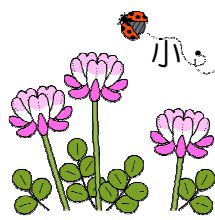
けている物を取り出して調べると、元の金属とは違う新しい物ができていることを取り上げました。実験結果の予想や確認をテンポ良く行うことで、全ての児童の活動時間を保障できるようにしました。また、予備実験を重ね、指導計画を練り直したことで、それぞれの児童が、化学変化に関する物質の粒の振る舞いをイメージ化することにつながったと思います。

中学校では、1年生第1分野「身の回りの物質」から、状態変化・物質の融点と沸点について扱いました。授業では、粒子に関する検討の前段階である融点の測定実験が中心になりました。生徒にとって複雑に思える実験装置ではありましたが、班のメンバーの協力なしには行えない実験だったために、どの生徒も熱心に課題に取り組むことができました。単元において、溶解と融解を状態変化の粒子モデルで深めることができることなどが話し合われました。

3 エピローグ

自分と友達との考えを交流することは、異なる考え方や表現を知ることとなり、思考を深めることにつながりました。そしてそれが、理科への興味・関心を高め、理科好きにつながっていくのではないかと思います。

研究の目的だけでなく、研究の場・時間を共有することは、小学校と中学校が互いを補い合うためにどのようなことができるかを考える機会となりました。さらに、研究を通して、小・中学校での9年間（生活科を入れて）や高等学校を含めた12年間の流れの中で、単元や領域を意識した授業計画をたてて実践することが、ますます大切であると思いました。



小・中のつながりを意識したコミュニケーション能力の育成をめざして

プロジェクト研修員(外国語活動・外国語)



1 はじめに

平成 23 年度から小学校において外国語活動が完全実施されることを踏まえ、外国語活動・外国語部会では、平成 19 年度から中学校英語科教員 2 名に小学校教員 2 名を加え、「小・中の連携」をテーマに研修を行っている。これまでの研究では、LESS プランの作成や授業実践、県内の小中合同研究発表校の視察等を行い、小・中の連携の在り方について研究を深めてきた。

2 研究の内容

【昨年度の取り組み】

昨年度は、小学校教員と JTE の T.T.による授業実践を行った。また、授業を小田原市内の各小中学校の教員に参観していただくことにより、中学校英語科教員が小学校の外国語活動の実態を理解すること、小・中の連携を今後どのように進めていけばいいのか話し合うことができ、テーマに関わる研究を進めることができた。

小学校における外国語活動の実態については、小学校によって取り組み方や教師の意識に違いが見られることが分かった。また、小学校担任と ALT や JTE との T.T.による授業をどのように進めていったらいいのか悩みを抱えている教員が多いことも理解し合うことができた。

【今年度の取り組み】

今年度は、小学校の外国語活動の実践とのつながりを意識した中学校での授業実践を行い、小学校で外国語活動を行ってきた生徒に対する授業の在り方について研究を進めた。

小学校で外国語活動を行ってきた生徒たちは、英語を話すことに抵抗が少なく、コミュニケーションがよくとれる。また、ペアワークもよくできる。小・中の連携を考えると、小学校の外国語活動で大切にしてきた「話したいという気持ち」、「目よりも耳、文字よりも音」を大切にして、中学校の授業を行うことが大事であると分かった。また、あいさつのやり取りやチャンツ、歌などの活動は引き続き大切にしていけるが、発達段階に合わせた適度なハードルを用意することで、できるようになった喜びを味わえることも確認し合った。

3 おわりに

2 年間の研究を経て、中学校区ごとの連携を進めていくことの大切さを実感した。プロジェクト研修員である私たちは、小・中学校の現状を発信していくことが必要だろう。

今後も、「小学校担任と ALT との連携の在り方」「小学校外国語活動の中で、どのようなコミュニケーションの力をつけていくのか」「中学校英語科教員から英語に慣れ親しむことができる

様々な手立てを、小学校教員が学ぶことができる場の確保」等について研究を深めていきたいと思う。



「表情の大切さ」

教育指導課指導主事 堀 賢一郎



つい最近、新聞などに「オレンジジュースを注ぐ場面を見るチンパンジーはジュースだけに集中しているが、幼児はジュースも見るが人の顔にも視線を注ぐ。」というニュースがありました。研究者は、「人は顔色を見て、心の状態をも推測して、次の展開を予測する。これは複雑な社会環境に適応するために、独自に獲得した学びのスタイルだ。」とコメントしていました。

ある中学校の美術の授業を参観したときの一場面です。

チャイムが鳴ると生徒全員の視線が一斉に先生に向けられます。

今日の課題は、「友達再発見」の5時間目、いよいよ友だちに描いてもらうポーズを決める日です。

授業の最初に、今日の課題について説明がありました。その中で、先生が自分を例にして「自分の好きなこと」「自分の長所」などの自己分析をしながら、前時の振り返りをしています。いくつかの例の最後に、「自分の直したいところ」として「もっと笑顔を増やしたい」と言いながらちょっとはにかむと、生徒もニコリと笑顔で答えたり、隣の友だちと顔を見合わせ同意の合図を送ったりしています。

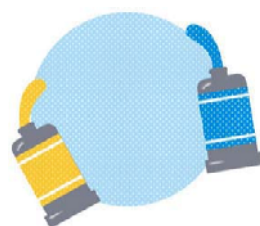
少しの後、和やかな雰囲気からちょっとざわつきそうになったその時です。先生がほんの僅かですが表情を変化させました。すると、その表情を感じ取った生徒のざわめきは潮が引くように静まりかえり、視線

が先生に集中しました。

その後改めて、生徒に課題を理解したか確認し作業を始めるよう指示をすると、それまでに生徒の中に膨らんでいた興味ややる気が一気に吐き出されるように、すぐに生徒は作業に取り掛かり、プリントで自己分析の結果を確認しながら情報交換し、どのように描いてほしいのか伝え、相談したポーズを実際にしたり、ポーズをする友だちをモデルに下書きしたり、というように学習が進んでいきました。

さて、授業中のいろいろな場面で、会話以上に、先生と生徒の表情での意思疎通の場面がたくさん見られました。実は、先生は意識して、生徒に心の機微を表情で伝えていたのではないのでしょうか。なぜなら、生徒たちにとって人の表情を読み取り、その思いなどを想像し対応することは、これからの人生を生き抜く力の一つになり、また、美術科の中で培う対象を見つめ感じ取る力の育成にもつながるからです。

さて、表情での意思疎通は、この授業だけで培われたものではありません。先生が、日々の生活の中で、生徒との信頼関係を築くことに力を注いできた賜物なのだと感じました。





これからの校内研究のあり方を考える。

～クローズアップ研修会・校内研究担当者研修会～



横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員の白井達夫先生を講師としてお迎えし、第3回校内研究担当者研修会を11月16日に実施しました。事前に参加者からの質問を先生にお渡しし、校内研究にかかわる疑問や悩みに答えていただくという、実践的な内容の研修会になりました。

教員の世代交代が進む中で、指導力、授業力を高めあう場としての校内研究の意義が改めて問われており、校内研究をOJT(On The Job Training)の一環にとらえ、常に学び合い、高めあう関係を作っていく場とすることも求められています。教育研究所では、これからも、各学校の校内研究が活性化するための支援を行っていきたいと考えています。

白井先生へのQ&A この一問四答!

※研修会の資料より抜粋

Q：校内研究の方向性や内容を、どのように決めたり示したりするとよいでしょうか？

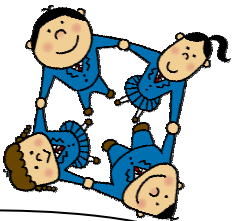
A：①初めから明確な研究仮説を打ち出すことは難しい。仮説検証型の研究方法は人文科学の分野ではなじみにくい。ただし、研究のプロセスでは大小さまざまな仮説（生成仮説）が生まれる可能性がある。共通の目標を明確にした後、それぞれがその目標達成に向け、実践的にアプローチしてもよい。

②教科目標の上位に「言語活動の充実」などの目標を置くと、教科の枠にしばられず全教職員が主体的に参加できる研究が可能となる。

③授業そのものを対象化して学ぶことが大切。それぞれの教師の経験や学習を交流する場にしていていく。授業構成だけでなく、個々の児童・生徒への対応の仕方などの中にも学ぶことは多い。

④カリキュラム・マネジメント*を意識して授業をつくる。

*学校の教育目標を実現するため、教育内容や方法と学校内外の資源とを結びつけたり、各教科等の関連を重視したカリキュラムを編成・改善したりして、教育の質を高めていく具体的な方策（川崎市立中原小学校の定義）



○小学校の参加者から○

*授業研究を通して、教職員同士のコミュニケーションを図ることが必要だと思いました。

*校内研究を「仮説検証型」から「事例集積型」へというお話に一番感銘を受けました。毎年、自分の考えた仮説で研究を進めていくことがいいことなのか悩んでいました。共通の目標を明確にすることの大切さを実感しました。

○中学校の参加者から○

*研究協議の方法や工夫について質問を出していましたが、本校の取り組みや視点が、今後も続けていけるものだとの確認しました。また、時系列以外の枠組みで付箋を使って協議することは、授業者自身にとっても励みになったり、よい刺激になったりするものだと思います、参考になりました。

夏の授業改善講座でも触れていましたが、「学び」のあり方や授業の進め方の工夫、生徒の変化をかき取り授業内容の工夫につなげていくことなどを、学校全体で考えていく必要性を感じました。つい生徒指導に追われがちになりますが、「校内研究」で教師間の連携を強めていけるようにしたいと思います。

「仮定（仮説）」から入るのではなく、今のあり方「過程」から研究を進めるということで、敷居が低くなり、校内研も身近になるものと考えています。

小田原の教育の充実に向けて

～平成23年度の教育研究所事業をふりかえって～



プロジェクト研修

小・中学校の教員がともに研究に取り組むプロジェクト研修も、いよいよまとめの時期となり、3月5日には、その成果報告会が実施されました。それぞれの部会のまとめをほんの少し紹介します。

国語 深く考えることや豊かに表現することは、すぐにできるようになるものではなく、日々の学習の中で少しずつみあげていかなければ身につかない。…表現をするためのスキルを向上させるだけでなく、表現内容をさらに深めていくことに課

社会 地域素材を生かして教材化することは、児童・生徒の学習意欲を喚起し、自らの生き方を問う学習につながる可能性があることが、研究を通して明らかになっ

算数・数学 「活用する力」を育てるためには、具体的な活用する場を意識した授業設計、指導法の改善、「学び合い高め合う学びの場」をつくるための教師の授業力の向上など、多くの課題が見えてきた。

理科 共通のテーマ「粒子概念」も、小中でつなげていく方法が授業を通して提案できた。「理科好きな子」は、小中を通して「自ら考え自ら確かめる」学習を通して育成できることも確認された。

保健体育 児童生徒の実態を把握することで、学習内容が明確になり、具体的な指導をすることができる。さらに、発達の段階のまとまりの視点からも実態を把握することで、小・中学校ですべきことが明ら

外国語活動・外国語 小・中学校の外国語の指導法における連続性を保つ努力が大切になる。また、生きた英語に触れることにより、「学ぶ喜び」が得られると判断で

道徳 児童生徒の道徳的実践力を養うには、教師自身が意欲的に取り組んでいくことが大切だと痛感した。

* 研究の詳細は報告書をご覧ください。



共同研究

平成23年度末をもって「小学校外国語活動に関する研究」「学校におけるOJTを活用した人材育成に関する研究」「小中学校が連携したキャリア教育に関する研究」「授業評価を活用した授業改善に関する研究」の4つの研究が終了となりました。今日の教育で取り組んでいくべき課題のよりよい解決に向け取り組んでまいりました。

研究の成果は、「研究のまとめ」として学校に送付する予定ですが、「OJT」「キャリア教育」に関する研究では、研究の概要がわかるリーフレットを作成し、全ての教職員の手元に届くようにいたしましたので、ぜひご覧ください。そして、各学校の教育活動の中に少しでもいかしていただきたいと思います。



自然観察会

残念ながら6月のツバメの観察と、1月の鳥の観察は雨で中止となりましたが、全8回の自然観察会を無事に終了することができました。昨年より41名の増加となる263名にご参加いただき（参加予定者含む）しました。

講師の先生のお話を聞きながら、身近な植物や虫などを観察し、理解を深めることは、教育活動にもプラスとなるだけでなく、何より、豊かな自然に触れることで、日頃の忙しさを忘れる癒しのひと時になるものと思います。平成24年度も、楽しく、様々な発見がいっぱいの観察会にしたいと考えています。

小田原教育 第116号

発行日 平成24年3月23日（金）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 佐久間 秀樹

〒250-8555 小田原市荻窪 300 TEL 33-1730